2010/07/05 更新

手塚治虫作品『鉄腕アトム誕生！大全』

―『アトム大使』から『鉄腕アトム』へ―

萩原　義雄

はじめに

昭和二十六年刊行予告には科学冒険漫画『アトム大使』手塚治虫作としています。　名前が「てづかおさむむし」です。主人公はケンちゃん（）とタマちゃん（大目玉男）の二人の小学生でした。二人と同じ姿をした別の地球にある日本東京、お茶の水小学校に通学するクラスメートです。学校の先生は、元私立探偵でもお馴染みのヒゲオヤジこと伴俊作先生、さらに科学研究所のお茶の水博士とも知り合いです。

科学冒険漫画『アトム大使』

〈第一回〉

「そうそうおかあさん　きょうこんなものをつかまえたけど・・・・」「きゃっうごいているわ」「なんだろう？」〔六頁5齣〕「まてまてこの世にいない生きものかもしれない」〔六頁6齣〕「わかった　ネズミというやつだ　いまから　二千年まえにいた動物とかいてある」〔六頁7齣〕「大発見だぞ　博物館へきふしよう」〔七頁8齣〕〔と、ぼくはこんな世界で大きくなった。井の中のカワズ……それがぼくたちだった。たとえば、こんなことがあった・・・・。〕〈前略〉「ああいきかえったか」「バ、バカめっ」「うーん、ここはどこ」「わしはお茶の水博士、ここは救命艇じゃ」〔八頁21齣〕「やれやれ空気といっしょにとびだしたからいいが・・・・」「そのとおりです」「バカメッ」「もう二どと、こんなまねをしないように話をしてやる。いいかわしたち人間は大むかし――二千年もむかし、地球という星にすんでいた。そこには草や木というものがはえ犬、ネコ、馬などとたのしく　くらしていた・・・・」〔八頁22齣〕「それからミズネもでしょう？」「ミズネではない　ネズミである」〔九頁23齣〕「第二の地球をさがして……それから二千年来こうして宇宙をさまよっているのだ」「おそらくきみたちも一生をこのロケットですごすことだろう」〔25齣〕「人のからだも昔と今とこんなにちがうんだ　引力がぜんぜんないからだ」〔九頁26齣〕やがて、「博士！大ニュースです。ロケットのはるか前方に空気のあるらしい天体が発見されました」「そりゃ、ほんとかっ」〔28齣〕。「たったいま本艇からしらせがありました」「ブラボー!!」〔九頁29齣〕「さっきのはとりけしじゃ。きみたちはじつにしあわせなときにうまれてきた」〔チュッ〕〔九頁30齣〕

〈第二回〉

「日本艇のみなさん！星はこくこく近づいてくる　うれしまぎれにあわてないよう……星にはなにがすんでいるからわからない　またわれわれのけいけんしない引力という怪現象がまっている」「えらいことになったな」「うん　うれしいようなこわいような」〔11頁0齣〕〈中略〉「もう電離層だ　あと十分で到着するはずだ」「先頭艇からめいれいです　「日本艇はあの北半球の細長い小島へ着陸すべし」とのことですぞ！」「第一にわしの鼻をおこしてくれっ」〔11頁3齣〕〝ババーン！〟〔12頁4齣〕「おとうさーん

ねえさーん　だいじょうぶですか？」「だいじょうぶだ　しかし　すごい引力だなあ」〔12頁5齣〕「みなさま、みなさま　本艇はぶじに到着です。いま、お茶の水研究所が空気の密度をはかります。この新しい世界を、米国艇では「第二の地球」と名づけることにきめた、そうです。われわれ日本人も、この島を「日本」とよぼうじゃありませんか。まもなく研究所から報告がまいります。あっ、きました、きました。おお、みなさん、ごあんしんください。外へでてもきけんではありません。窓をあけましょう。そして新鮮な空気を胸いっぱいすおうではありませんか。……」〔11頁6齣〕

〈第三回〉長編科学漫画　CAPTAIN　ATOM　『アトム大使』手塚治虫

●「えっどうだおどろくじゃないか　この星の動物はなにもかも　まえの地球のとおなじだぞ」「うへっ」〔15頁2齣〕

●「ホイルというひとは、宇宙にはすくなくとも十万の地球のような遊星があるといっている」〔16頁5齣〕

●「しんぱいするな　この探索艇は流星雨にあたってビクともしない」〝ぐうーん〟〔21頁53齣〕

〈第四回〉長編科学漫画　CAPTAIN　ATOM　『アトム大使』手塚治虫

●「わがサーカスの花形アトムくん!!」〔26頁4齣〕

●「ハハハハ　アトムは人間なみにものもたべるし水ものむんですよ」〔26頁11齣〕

●「と思われるのはむりはない　じつはこの子人間のうまれかわりでね」〔27頁13齣〕

●「じつは天馬博士のひとりむすこだったんです」「えっ　天馬博士？」〔27頁14齣〕

●〔そうです　天馬博士には　トビちゃんというこどもがあったのですよ〕〔27頁15齣〕

●〔目にいれてもいたくもないほどかわいがっていました〕〔27頁16齣〕

●〔ところがある日……〕〝ガチャン〟〔27頁17齣〕

●「うわあ　トビオ！トビオや!!」〔自動車にひかれてしまった〕〔27頁18齣〕

●〔それいらい博士は気がくるったようになりました〕〔27頁19齣〕

●〔博士は全工場を動員しました〕「今までにない精巧なロボットをつくるんである！」〔27頁20齣〕

●〔ロボット科学のすいがあつめられ……〕〔28頁21齣〕

●〔からだは弾力性のあるプラスチックで　つくられた〕〔28頁22齣〕

●〔うしなったトビちゃんのすがたを科学のちからでもう一どつくりだそうとしたのです〕〔28頁23齣〕

●〔こうしてトビちゃんは、科学の芸術品として、ほんものとほとんどかわらずに　うまれかわったのでした〕〔28頁24齣〕

●〔博士の心はなぐさめられました〕〔でも　やがて　おそろしいけってんにきがついたのでした〕〔28頁25齣〕

●〔それはトビちゃんが成長しなかったことです〕〔28頁26齣〕

●〔博士はかえってそのことをにくみました〕〔28頁27齣〕

●「そして　とうとう　わたしに　うりとばしてしまったんです」〔28頁28齣〕

●「今では　トビちゃんではない」「アトムはじぶんでちからを〇から五百万ダインまで調節できます」〔28頁29齣〕

●「だから　けっして　きけんではないです　ハハハハ……」〔28頁30齣〕

［ロボット対人間の決闘　**いよいよ本夕6時　宇宙劇場**］（手書き文字）〔29頁31齣〕

※この29頁から34頁にアトムとタマちゃんとの劇場対決①数字計算②積み木③体藝力の三つに及ぶ前中後が描かれています。ここで、何とこの地球にも、タマちゃんそっくりのタマオくんやおとうさんが居るのです。

〈第五回〉長編科学漫画『アトム大使』手塚治虫

＊前号まで……ほかの地球からこの地球へとんできた人間たちの中に、タマオという少年がいた。しらずに地球人のサーカスにつれられて東京へいき、ロボットのアトムと試合をすることになったが、そのとき自分とそっくりな少年があらわれて大さわぎになった。

●「さあ、学校へいくじかんだ　へんなことを先生にしゃべったりしちゃあだめだよ　いっておいで」〔35頁0齣〕

●「わしもいまは教師をしているがそのむかしは私立探偵伴俊作としてしられていたものだ　よろしい」〔37頁24齣〕

●「日本艇？」（手書き文字）「どうか　ぼくを日本艇のうちへ帰してください」〔40頁47齣〕

＊もう一組のお茶の水博士たちとあったら、はたしてどんな事件がまきおこるでしょうか？九月号をごきたいください。（つづく）

〈第六回〉長編科学漫画『アトム大使』手塚治虫

◇前号までのあらすじ◇

この物語は、科学万能時代の何千年もさきのお話です。その時代の大むかしは、地球という星には人間がすんでいた。しかし、その地球にもさいごがきて、人々はロケットをつくって宇宙へにげた。そして、宇宙人となり、あたらしい第二の地球をさがして、さまよっているうちに、ついに、空気のある天体を発見した。　ロケットのひとつ、日本艇は、北半球のほそながい小島へ着陸しこの島を、「日本」とよぶことにした。この日本艇のタマオという少年が第二の地球の人間にであい、人間を見たと報告するが、だれも信用せず、相手にしなかった。そこでタマオは、ふたたび探検にでかけたが、ついにまい子になり、第二の地球の人間につれられて東京にでてきた。しかし、つれてきた人たちは、サーカスの人間で、タマオは、サーカスの花形ロボットのアトムといろいろの試合をし、お客に見せることになった。けれどその試合のさいちゅうにタマオはにげだしたが、地球人のタマオと学校で顔をあわせ、タマオがふたりになり大さわぎになった。そのときサーカスのアトムがあらわれ、耳の大きいタマオが宇宙人であることをみんなに知らせた。地球人のお茶の水博士やタマオらは、ひじょうにおどろき、宇宙人のロケットをさがしに出発した。……

ふたり、ふたり

※「ヒゲオヤジ」〔44頁16齣〕

※「お茶の水博士」〔44頁17齣〕

※「仁王」〔44頁18齣〕

※「ケン一」〔45頁30齣〕

〈第七回〉長編科学漫画『アトム大使』手塚治虫

※ロケットを出て地球に暮らすことになった。日本国民の人口総数八千万人…が二倍となる一億六千万人、食糧大臣の芋田君が悩むなか、アトムの生みの親である天馬博士がとんでもない考えをもくろむ。細胞を小さくする薬です。

〈第八回〉長編科学漫画『アトム大使』手塚治虫

アトムは、天馬博士を悪いことをする人として認識した。だが、天馬博士はそのアトムをエネルギー銃で動けなくしてしまう。

〈第十回〉長編科学漫画『アトム大使』手塚治虫

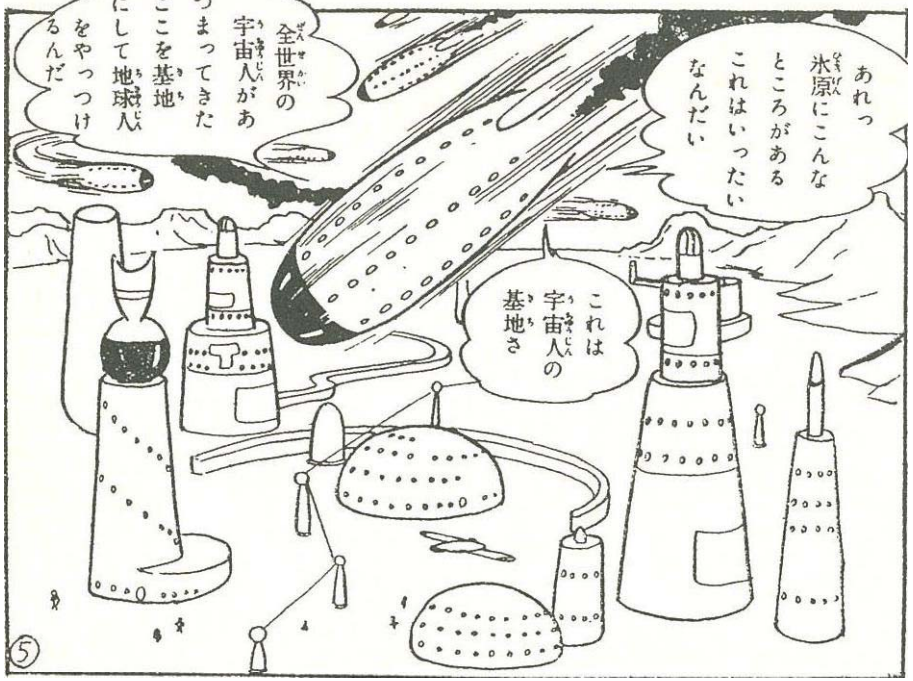
地球人のヒゲオヤジとお茶の水博士が二人して天馬博士の赤シャツ隊を使っての「宇宙人狩り」という非道を問い糾す場面です。〔71頁27齣〕ですが、逆に天馬博士に暗いところに幽閉されてしまいました。ここで同じくサーカスの団長が幽閉されていました。かれがアトムを引き出してきます。それは、地球人でもない、宇宙人でもないアトムを全権大使として宇宙人のもとへ遣ることでした。

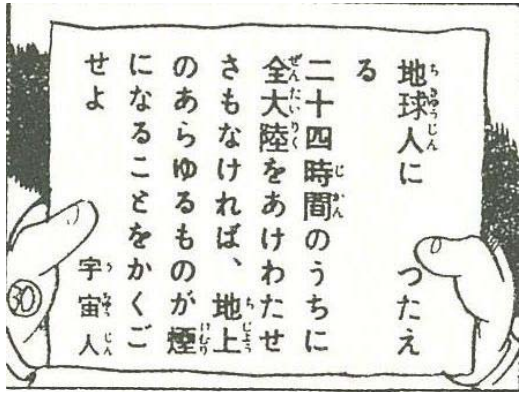
〈第九回〉長編科学漫画『アトム大使』手塚治虫

宇宙人のヒゲオヤジは、天馬博士の細胞縮小薬（収縮薬）を注射され小人にされてしまった。

科学省の赤シャツ隊（スパイけいさつ）が天馬博士の命令一過、耳の大きい特徴を持つ宇宙人狩りをはじめています。お茶の水博士も小さくされてしったのです。

〈第十一回〉長編科学漫画『アトム大使』手塚治虫

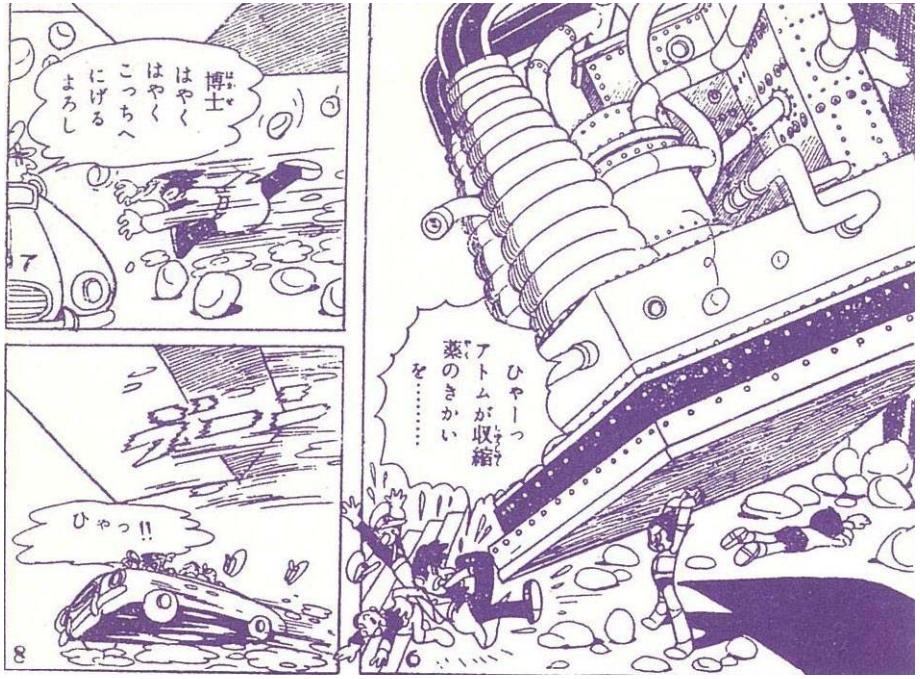




地球の南極に宇宙人の基地が設けられました。全世界の宇宙人が集まってきました。地球遊撃隊司令官は、宇宙人の「ケン一」くんです。そして、第一の攻撃目標は科学賞です。宇宙人の飛行船が飛来し、科学省の建物に爆弾を投下していきます。幽閉されていた三人も爆撃のまっただ中に身を置かれました。そしてビラが落ちてきました。その内容は、左図の如しです。

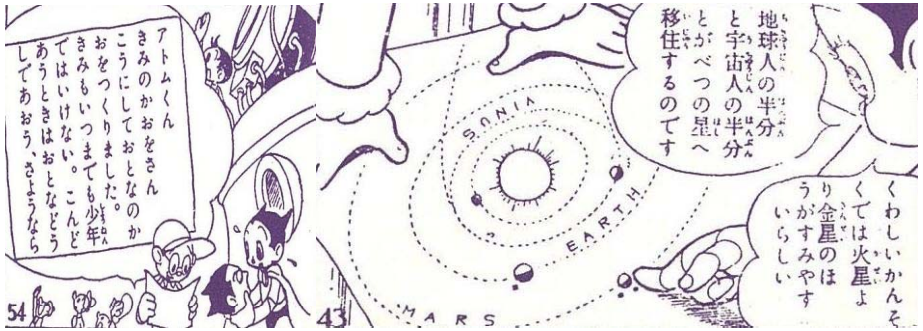
〈第十二回〉長編科学漫画『アトム大使』手塚治虫

地球人のケン一はアトムを再び動かす。●「アトム！きみは よい わるいのみわけをよくしっている ぼくたちをこんなめにあわせたやつらをめちゃくちゃにやっつけろ」〔80頁0齣〕



アトムは科学省を破壊し続けていく。そして、天馬博士と部下である赤シャツ隊を窮地に追い詰めていき、最後には天馬博士は、味方の赤シャツ隊により自らの「収縮薬X」を身に浴びてこの世から消滅してしまう。

●「平和の道はただ一つ　アトムに平和の使節として南極へいかせることである」〔82頁24齣〕



※アトムの平和交渉がはじまりました。その提案が、●「地球人の半分と宇宙人の半分とが別の星に移住するのです」「くわしいかんそくでは火星より金星のほうがすみやすいらしい」〔84頁43齣〕

宇宙人のケン一は、この譲歩案を鵜呑みにできないほど地球人に対して疑念を持っていたのです。地球人の真意とそして大使であるアトムのロボットである誠意を見せろと迫ります。これに対し、アトムは、自身の首部位を指しだしたのです。

●「これほどまでいってもきいてくれないんだね　わかったよ　ぼくの命よりたいせつなものをさしあげよう」〔46齣〕